

歌い継がれる女的情念

——平安から昭和、令和へ——

榎 田 百 華

はじめに

「女的情念」と聞くと、何を思い浮かべるだろうか。年末の音楽番組を観ていると、「演歌」と呼ばれるジャンルの曲紹介で、この「女的情念」という言葉を多く耳にする。『日本国語大辞典』によると、情念とは、「心の働きと思い。また、強くとらわれて離れない愛憎の感情。」である。⁽¹⁾一途に思い続ける愛の執着を表わしている。そのため、女的情念は歌となり、表現されることが多い。

例えば、『北の螢』（作詞阿久悠・作曲三木たかし・歌唱森進一）の歌詞には、愛する人への女心を表わす言葉が並べられている。さらに注目したいのが、「螢」である。『北の螢』では、恋する女の魂を、「螢」に見立てている。

『天城越え』では、嫉妬に狂う女の愛が激しく表現されている。

この女には実はモデルがいる。鎌倉初代將軍源頼朝の妻北条政子である。尼將軍とも呼ばれる女性で、強いイメージが強い。しかし、その政子的情念を題材としたという点で、興味深い。

そこで本稿では、『北の螢』と『天城越え』の二曲を、「女的情念」とは何か、どのように表現されてきたのかを論じていくこととする。

一 螢

現代では「ほたる祭り」も開催され、夏の風物詩として多くの人から愛されている螢。この螢は、いうまでもなくホタル科の昆虫である。闇夜に放たれる螢の光は、輝かしく、優美なものとして捉えられているが、その反面、恐ろしいものとしての考え方もある。『日本書紀』には、次のような記載がされている。

：然れども彼の地に、多に螢火なす光る神と蠅声なす邪神と有り。⁽²⁾

〔『日本書紀』卷第二（扉）「九」葦原中国の平定、皇孫降臨と木花之開耶姫〕

ここでは、「蠅声なす邪神」と同等の「螢火なす光る神」として螢が記されている。すなわち、邪神であり、「恐ろしいもの」として捉えられている。ではなぜ、現代と異なる考え方が生まれたのだろうか。そこには、いわゆる国風暗黒時代が大きく関係している。国風暗黒時代とは、平安時代初期から約百年間のことを指し、和歌が公の場に出てこない時代である。この時代、日本は中国を見習った国づくりが行われていた。国の編制から文化の面においても、中国に倣うようになり、漢詩文の隆盛期とも重なる。そのため、和歌よりも漢詩文が注目されていた。故事成語の一つに「螢雪の功」がある。これは、「螢火で書を見ること」であり、苦学して学問を修めた成果を意味している。漢文『本朝學原浪華鈔一』には次のように記されている。

此ハ唯是四方海波平ナル御代ノ謂耳、對螢雪トハ、學問ヲ勵ムコトヲ云、晋書、車胤字武子、南平人、恭勤不倦、博覽

多通、家貧不常得油、夏月則練囊盛數十螢火、以照書以夜繼日焉、孫氏世錄曰、孫康家貧無油、映雪讀書⁽³⁾

〔『本朝學原浪華鈔一』〕

ここからもわかるように、『孫氏世錄』に「孫康家貧しくして、常に雪に映じて書を読む」という記載がある。灯りをともす際の油が買えず、雪に螢の灯りを映して書物を読んでいた。すなわち、螢火が勉学において用いられているのだ。この優美さが、時を経て、いつしか「螢火で女性を見ること」となり、恋の風情としての見方も生まれた。『源氏物語』「螢」の巻には次のように記されている。

何くれと言長き御答へ聞こえたまふこともなく思しやすらふに、寄りたまひて、御几帳の帷子を一重うちかけたまふにあはせて、さと光るもの、紙燭をさし出でたるかとあきれた。螢を薄きかたに、この夕つ方いと多くつつみおきて、光をつつみ隠したまへりけるを、さりげなく、とかくひきつくるふやうにて。にはかにかく掲焉に光れるに、あさましくて、扇をさし隠したまへるかたはら目いとをかしげなり。⁽⁴⁾

この場面では、「螢」により女性が照らされ美しく見える様子が描かれている。夕方頃、薄い帷子に集めておいた螢を大臣が隠し持っており、何気なく放ち、明るく照らされた姫君ははっと驚いた。そして扇で隠すその横顔から、美しい風情を感じている。また『伊勢物語』三九段にも螢の光で恋しい女性が照らされる場面が描かれている。

源の至といふ人、これももの見るに、この車を女車と見て、寄り来てとかくなまめくあひだに、かの至、螢をとりて、女の車に入れたりけるを、車なりける人、この螢のともす火にや見ゆらむ⁽⁵⁾、

亡くなった皇女に恋をしていた色好みの源至が、女の顔が見られるかもしれないと、柩を乗せる車の中に螢を放った。しかし、しかるべき身分の女性であったこともあり、同乗していた男が懸念し、この灯りを消そうとした場面である。

このように、「螢火で書を見ること」が時を経て、「螢火で女性を見ること」へと変わり始め、恋の風情としての見方が生まれた。また、『枕草子』には次のように記されている。

春はあけぼの。やうやうしろくなりゆく山ぎは、すこしあかりて、紫だちたる雲のほそくたなびきたる。

夏は夜。月のころはさらなり、闇もなほ、螢のおほく飛びちがひたる。また、ただ一つ二つなど、ほのかにうち光て行くもをかし。雨など降るもをかし。

秋は夕暮。夕日のさして山の端いと近うなりたるに、鳥のねどころへ行くとて、三つ四つ、二つ三つなど飛びいそぐさへあはれなり。まいて雁などのつらねたるが、いと小さく見ゆるは、いとをかし。日入り果てて、風の音、虫の音など、はた言ふべきにあらず。

冬はつとめて。雪の降りたるは言ふべきにもあらず、霜のいと白きも、またさらでもいと寒きに、火などいそぎおこして、炭持てわたるも、いとつきづきし。昼になりて、ぬるくゆるびもていけば、火桶の火も、白き灰がちになりてわろし。⁽⁶⁾

（『枕草子』（扉）一、春はあけぼの）

『枕草子』は平安時代中期に清少納言によって執筆された随筆である。ここからもわかるように、当時、貴族たちの風雅な楽しみが、春は「花見」、夏は「螢見」、秋は「月見」、冬は「雪見」であった。これが江戸時代には庶民に真似され、鑑賞する風習が始まり、明

表1 蛍の分類

	優美なもの	恐ろしいもの
上代		邪悪な神 『日本書紀』
中古	蛍火で書を見る 『蒙求』 蛍見 『枕草子』 蛍火で女性を見る 『源氏物語』	蛍は魂 『後拾遺集』
中世		
近世	ホタル狩り 庶民の鑑賞会	
近代	ホタルツアー ホタルの研究所	
現代	ほたる祭り	蛍は魂 『蛍』 稲川淳二 『北の螢』 阿久悠

治時代には日本で最初のホタルの研究所が作られた。また、名所の宇治では、ホタルツアーなども行われていた。一方、『後拾遺集』において和泉式部が飛び交う蛍を自身の魂と詠み、また、現代においても、歌や怪談話においても蛍が魂と重ねられることから、恐ろしいものとしての見方も残っている。

以上のことをまとめると、次の図のようになる。

本来、蛍は恐ろしいものと考えられていた。現在、私たちの中の蛍には表立って優美なものという捉え方があるが、裏には恐ろしいものとしての見方も残っている。

では実際、作品に登場する蛍は、どのように描かれているのだろうか。ここで、『源氏物語』、『伊勢物語』、『古今和歌集』に登場する蛍を挙げてみよう。

(A) 『源氏物語』「三」源氏、蛍火により宮に玉鬘の姿を見せる

螢宮「なく声もきこえぬ虫の思ひだに人の消つにはきゆるものかは思ひ知りたまひぬや」と聞こえたまふ。かやうの御返しを、思ひまはさむもねぢけたれば、疾きばかりをぞ、

声はせで身をのみこがす螢こそいふよりまさる思ひなる

らめ (玉鬘)

など、はかなく聞こえなして、御みづからはひき入れたまひにければ、いとほるかにもてなしたまふ愁はしさを、いみじく恨みきこえたまふ。

「なく声もきこえぬ虫」は蛍のことである。「思ひ」の「ひ」には、「火」がかかっている。蛍の光でさえ、消そうとして消えるものではない。だからこそ、私の胸で燃える火は、どうしたら消えるも

のなのか、と恋に悩む女心が詠われている。この宮の思いに玉鬘が返した歌が「声はせで…」の歌である。鳴く声も立てず、ただ身を焦がす螢のほうが、あなたのように声に出すより、もっと深い思いなのだろうという意味が込められている。このように、この場面では、「恋心」と「螢」がかけられている。

(B) 『伊勢物語』 四五 行く螢

むかし、男ありけり。人のむすめのかしづく、いかでこの男にものいはむと思ひけり。うちいでむことかたくやありけむ、もの病むになりて、死ぬべき時に、「かくこそ思ひしか」といひけるを、親、聞きつけて、泣く泣くつげたりければ、まどひ来たりけれど、死にければ、つれづれとこもりをりけり。時は六月のつごもり、いと暑きころほひに、宵は遊びをりて、夜ふけて、やや涼しき風吹きけり。螢たかく飛びあがる。この男、見ふせりて、

ゆくほたる雲の上までいぬべくは秋風吹くと雁につげこ

せ

暮れがたき夏のひぐらしながむればそのこととなくものぞ悲しき⁽⁸⁾

男が大事にしていたある娘が、愛を訴えたかったが、口に出せず、その思いが鬱積し、病に倒れた。死にそうになった時、「深く恋慕しておりました。」と言っていたことを告げられた男は、あわてて家に駆け付けた。死に遭い、そのまま喪に服していた六月終わりの夜に、螢が高く飛び上がった様子を見て、詠んだ歌である。すなわち、ここでは螢が、「恋心」と「人の魂」に重ねられている。

(C) 『伊勢物語』 八七 布引の滝

かへり来る道とほくて、うせにし宮内卿もちよしが家の前来るに、日暮れぬ。やどりの方を見やれば、あまのいさり火多く見ゆるに、かのあるじの男よむ。

晴るる夜の星か河べの螢かもわがすむかたのあまのたく火か

とよみて、家にかへり来ぬ。その夜、南の風吹きて、浪いと高し。⁽⁹⁾

きらめく海人の漁火を星や螢かと表現したものであり、ここでの螢は「光るもの」として捉えることができる。かつて、螢の光は「星」とも考えられていた。万物に精霊があると信じられており、星も同じように信仰され、悪霊が宿るとも見られていた。本節冒

頭で提示した『日本書紀』の「然れども彼の地に、多に螢火なす光る神と蠅声なす邪神と有り。」での「螢火なす光る神」が、星を意味することも数多くの研究者の中で一致している。つまり、「螢星」なのである。

(D) 『古今和歌集』五四三

あけたてば蟬のをりはへなきくらしよるはほたるのもえこそわたれ⁽¹⁰⁾
(読み人知らず)

日中は恋に泣き、夜は恋に心を燃やし続けている姿を、蟬と螢に例えて詠んでおり、「恋心」と螢がかけられている。

(E) 『古今和歌集』五六二

ゆふされば螢よりけにもゆれどもひかり見ねばや人のつれなき⁽¹¹⁾
(紀友則)

夜が迫り、私の思いが闇夜に飛ぶ螢の火よりも燃えているのに、恋の炎は目に見えないからか、気づいてもらえず、思い人が冷淡な様であることを詠っている。この歌も、「恋心」が螢に例えられ、詠まれている。

このように、五つの用例では「恋心」や「人の魂」、そして「光るもの」の例えとして、螢が用いられている。これらほとんどが、「恐ろしいもの」には当てはまらない。「恋心」に例えているものは、恋に悩む姿が描かれているが、「恐ろしいもの」としては描かれていない。唯一描かれているのは、「人の魂」として捉えることのできる『伊勢物語』四五段の歌である。

二 和泉式部と螢

和泉式部は、恋に生きる女として有名である。二〇歳の頃、一〇歳年上の橘道貞と結婚し、後に小式部と呼ばれる娘が誕生している。夫道貞と共に任国へ下る際には次のような歌を詠んでいる。

おのれただ満ち来る潮もありけるを思ふ人とぞわれは舟出る⁽¹²⁾

この歌には、「二人で満ちてくる潮もあるが、私は思う人と共に船出をする。」という意味が込められており、道貞への思いが溢れている。

しかし、この結婚生活も徐々に二人の間に不和が生じるようになった。道貞が任地に赴いている間に、和泉式部は、冷泉天皇の皇子である弾正宮為尊親王と恋に落ちてしまうのだ。為尊親王は、

艶聞が絶えない人で有名であり、この機会を狙い、接近し口説き、恋に落ちたと考えられている。しかしこの恋は、為尊親王の死をきっかけに終わりを迎えた。

恋多き女和泉式部の恋は、これで終わらなかった。恋人を亡くしたものの、新しい恋へと走ったのだ。その相手は、為尊親王の弟敦道親王である。正妻との不仲を理由に、和泉式部を自分の邸へ入れた。激怒した正妻は出ていき、また、これらの出来事を引き金に、道貞との夫婦関係にも罅が入っていった。ついに、道貞は和泉式部のもとから去って行った。そして、四年続いた敦道親王との恋も、彼の病死により、突然終わりを告げる。

和泉式部といふ人こそ、おもしろう書きかはしける。されど、和泉はけしからぬかたこそあれ。うちとけて文はしり書きたるに、そのかたの才ある人、はかない言葉の、にほひも見えはべるめり。歌は、いとをかしきこと。ものおぼえ、うたのことわり、まことの歌詠みざまにこそはべらざめれ、口にまかせたることどもに、かならずをかしき一ふしの、目にとまる詠みそへはべり。それだに、人の詠みたらむ歌、難じことわりゐたらむは、いでやさまで心は得じ。口にいと歌の詠まるるなめりとぞ、見えたるすぢにはべるかし。恥づかし

げの歌詠みやとはおぼえはべらず。⁽¹³⁾ (『紫式部日記』)

多情な性格であり、世の中を騒がせ続けた彼女は、父から勘当もされた。時に「愛欲に生きた歌人」と称されることもある。⁽¹⁴⁾ 数々の歌を後世に残せたのは、恋に生きた彼女ならではのと言える。

和泉式部は、後に藤原保昌と二回目の結婚を果たしている。藤岡忠美氏によると、寛弘七年頃のことという。⁽¹⁵⁾ 保昌も、道貞同様に単なる同伴者というだけでなく、歌人和泉式部に必要不可欠な人物であった。その保昌を思い、詠んだ歌が、次の「もの思へば」の歌である。

をとこにわすれられて侍けるころ、貴船にまゐりてみたらし川にほたるのとび侍けるをみてよめる (和泉式部)
もの思へば沢のほたるもわが身よりあくがれ出づるたまかとぞみる⁽¹⁶⁾

ここでの「をとこ」は、夫藤原保昌である。保昌に忘れられた頃、和泉式部は当時諸願成就の神と言われていた貴船神社を参拝した。そこで前を流れる貴船川のほとりでは、蛍が多く飛び交っていた。その光景を目にし、詠んだ歌である。この歌は、和泉式部の歌に

多く見られる「もの思へば」の始まり方で、「あの人のことを考えていると、飛び交う蜚が私の身体から彷徨い出た私の魂ではないかと見えた」と訳することができる。当時、恋に焦がれると、思いを寄せるため、魂が夢幻の状態により身体から遊離し得ると考えられていた。これを「遊離魂」という。

唐代の伝奇小説の中にも、遊離魂が題材となった恋愛物語がある。後世に数多くの影響を与えた、陳玄祐の『離魂記』である。恋を引き裂かれた悲嘆、遠く離される中で思慕が描かれる物語であり、後に駆け落ちする王宙と倩娘。しかしこの倩娘は、思いつめた一念が強烈であつたために遊離した、倩娘の魂であつたのだ。陳明姿は、「文学の中の遊離魂―『離魂記』と『源氏物語』を中心として―」の中で、『離魂記』と『源氏物語』を次のように比較している。

『離魂記』では、人に害を加えない遊離魂が語られているのに対して、『源氏物語』では、怨念を持ち、人に害を加える遊離魂の物語が語られているのである。(中略)『源氏物語』には押えても押えても、押えがたい人間の愛憎が凄絶に物語られている。(中略)同じく遊離魂を題材とする中日両国の虚構の物語、唐代の『離魂記』と『源氏物語』の生霊譚は、いず

れも現実に幻滅を感じ、文学に救済の道を求めたものであるが、しかし、『離魂記』が願望遂行に基づいて、現実に求め難い「かくありたい」人生を語ったのに対して、『源氏物語』の生霊譚は「もののあはれ」に基づいて、宿世観の強く底流する現実世界の「かくある」人間の姿を語ったのである。⁽¹⁸⁾

『離魂記』では、読者と作者の共通の願望に基づき、現実では求め難い「かくありたい」人生を語っている。遊離魂の持つ異次元が現実世界に導入され、現実世界では到底叶わぬ願望が完全に遂行されている。その一方で、『源氏物語』では、抑えがたい人間の愛憎が凄絶に物語られており、思うまいと決心しても、結局は物思いを一層深めることとなった。平安時代には、従来の遊離魂の考えと「もののけ」が一体化し、文学に登場している。遊離魂に個性を与え、怨念により、自ら行動する主体として遊離魂を表現したのではないかと推測されている。つまり、願望を虚構の文学の世界に完全に融合させ、その中で物語が繰り広げられる『離魂記』に対し、『源氏物語』はたとえ虚構にしても、無惨な人間の存在をありのままに描いているのだ。

また、『白氏文集』の、玄宗皇帝と楊貴妃との悲恋物語を詠じた「長恨歌」にも注目してみたい。ここでも「蜚」が登場し、「恋心」

と重ねられている。

夕殿螢飛思悄然
秋燈挑盡未能眠
遲遲鍾漏初長夜
耿耿星河欲曙天
鴛鴦瓦冷霜華重
舊枕故衾誰與共
悠悠生死別經年
魂魄不曾來入夢⁽¹⁹⁾

この詩は、『源氏物語』の桐壺巻、葵巻、幻巻にも大きな影響を与え、中でも幻巻は、四季の景物に託して源氏が紫の上を偲んでいる。「夏、蛸・螢につけ尽きぬ悲しみを詠む」では、次のように「長恨歌」が引かれている。

螢のいと多う飛びかふも、「夕殿に螢飛んで」と、例の、古言もかかる筋にのみ口馴れたまへり。

夜を知る螢を見てもかなしきは時ぞともなき思ひなりけり

(夜を知って光を放つ螢を見ても悲しいのは、夜昼の別なく亡きお方を恋いしのぶ思いの火に焦れるわたしではあつた。)⁽²⁰⁾

「螢がじつにたくさん飛びちがっているにつけても、『夕殿に螢飛んで』と、例によって、古詩もこうした筋のものばかりを、いつもお口ずさみになっていらつしやる。」という意味である。光源氏自身が、長恨歌の詩句を口ずさみ、「玄宗の思い」と「亡き紫の上への自身の思い」を重ねている。

三 『北の螢』

『北の螢』は、作詞家阿久悠と作曲家三木たかしが世に放った楽曲である。これは、同名映画『北の螢』の主題歌にもなっており、今では、森進一の代表曲の一つである。阿久と三木のコンビは、石川さゆりの『津軽海峡・冬景色』や西城秀樹の『ブルーメランストリート』、岩崎宏美の『思秋期』など、数々のヒット曲を手掛けており、昭和歌謡を語る上で外せない二人である。その二人が昭和五九年に生み出した『北の螢』は、日本レコード大賞⁽²¹⁾では金賞、日本作詩大賞⁽²²⁾では大賞を受賞している。

この曲中の「泣く」と「舞う」の主語に注目したい。一番では、

山、風、雪。そして二番では、雪、鳥、夢である。これらは目に見えるもの、目に見えないもの、初めは見えるが後に見えなくなるものにそれぞれ分けることができる。つまりここから、どの類のものも全て泣くほどの心情を表わしている。主人公の女は、「いつ泣いて」「いつ舞う」のか。ここからは、心のどこかでまだ見ぬ可能性を信じる女心が秘められている。

次に、この歌詞中の「赤い螢」と「恋の螢」に注目する。一番では、「赤い螢」が、「白い躰」と対比されており、女はまだ死んではいけないものの死んでいるかのように表現されている。その状態でも、燃え続け勢いのある恋心が螢となつて、心をつき破つていくのである。一方、二番では、遠くに離れたとしても、思い人の匂いを追い求め翔んでいく螢のように、女の恋が描かれている。赤く燃え続けるいのちが途絶えたとしても、「恋の螢」が翔んでいくことから、死んだとしても、思い人への気持ちは消えない情念が強く伝わってくる。もし躰が死を迎えたとしても、魂が生き続け、思い人のもとへ螢となつて翔んで行くのである。

そしてサビは、螢に恋しい人の元に翔んで行けと呼びかける歌詞が繰り返される。この女は怨みを覚えている状態であり、恋する男のもとへと翔んで行きたい思いに溢れている。作曲の三木は、阿久からこの詞を受け取った際に、「御詠歌のイメージに重なっ

た」という⁽²³⁾。御詠歌とは、霊場巡礼の際に歌われたことが始まりとされている、仏教の教えを旋律に乗せて歌う宗教的伝統芸能のことである。これを受けて、宗教学者である山折哲雄氏は、先に見た和泉式部の「ものおもへば」の歌を思い起こしたという。ここでもう一度、和泉式部の歌を取り上げる。

もの思へば沢のほたるもわが身よりあくがれ出づるたまかとぞみる

和泉式部の歌も『北の螢』も、愛を捧げ続けるがため、恋に狂うこの魂を、螢に喩えている。そして、和泉式部の歌では「ほたるもわがみよりあくがれいづるたま」、『北の螢』では「胸の乳房をつき破り赤い螢が翔ぶ」と、自身の身体から、螢が出ていく場面が共通して想像できる。

つまり、平安時代に詠まれた歌と同じ世界観が昭和にも引き継がれているのだ。実際に残されている阿久の言葉に、『北の螢』が和泉式部をイメージして作られたという内容のものはない。しかし、阿久が大学卒業時に作成した卒業論文のテーマが「和泉式部」であり、世界観が受け継がれたといっても過言ではない。この鬼気迫る世界観、そして紡ぐ言葉に多くのファンがいること。和泉

式部と阿久悠には、どこか通じるものがある。

和泉式部の歌では、「男に忘れられている頃、貴船の川で、和泉式部が、飛ぶ蜚を見て、自分の魂かと思つた」ことを詠んでいる。歌そのものの自体は短い、具体的であり、聞き手も明確に場面を思い浮かべることができる。一方、阿久悠の歌詞『北の蜚』では、具体的な場面描写はない。また、蜚にしても、和泉式部が「目の前の蜚を見て詠んでいる」のに対して、阿久悠は「実際に蜚を見ている」わけではない。しかし、和泉式部の歌では、自然そのものに動きがないのに対して、阿久悠の歌では「山が」「泣く」「風が」「泣く」のように、自然そのものに動きがある。阿久悠も、古典和歌の心物対応構造を用いているのである。心物対応構造とは、序詞や掛詞などに見られる景物（自然）と心情（人間）の組み合わせのことである。同音異義語の「掛詞」は、「待つ」という気持ちと、樹齡の長い「松」が対になっている。かつては、松を我慢強く待ち続ける心の象徴だと考えていた。心は目に見えず伝わりにくいため、共有できる具体物で、恋心を伝えたのだ。「自然」と「人間」のような、共時的な存在を重ね合わせようとする姿勢の表れである。そして三つ目は、前者の女が「耐え忍ぶ」のに対し、後者の女は「怨み、男のもとへ魂を翔ばす」ことである。歌の世界で描かれる女を見ると、阿久悠の歌での女の方が、積極的に行動

に移していることがわかる。

ともに、恋に悩み、自身の躰から蜚を思い人のもとへ飛ばす。自然が用いられており、感情と重ねられる。しかし、平安時代には実際に目にした景物と想像を重ね合わせていたが、目の前にある景物以外にも重ねているのが昭和である。また、耐え忍ぶ女から立ち向かう女へと、女の強さにも変化が生じている。

四 『天城越え』

女の情念を歌った現代の名曲に、『天城越え』がある。一九八六年に発表されて以来、現在でも圧倒的な人気を誇る石川さゆりの名曲である。当時、石川の担当であった中村一好ディレクターが「NHK紅白歌合戦で初めてのトリを取らせる」と豪語した作品である。一四歳で女優デビューし、アイドルとして歌手生活を送っていた石川さゆり。私生活では二三歳で結婚、二七歳で出産も経験している。そこで「今後の石川をどうするか」という話し合いの中で、新たな作品を生み出すべく制作依頼を受けたのが作詞家吉岡治である。吉岡は、童謡『おもちゃのチャチャチャ』から美空ひばりの『真赤な太陽』といった幅広い作品を世に送り出している。⁽²⁴⁾良妻賢母のイメージを崩すべく選んだ場面は「女性が逆上し、修羅場となって金切り声を発する」というものであった。具

体的には、浮気現場に押しかけ、叫び狂う女を演じさせるものだ。

この作品は、実際に天城にある老舗宿「白壁荘」に泊まり作り上げられた。その『天城越え』誕生秘話が、NHK土曜特集「そして歌は誕生した」の中で語られている。次は、その番組の一部を文字に起こしたものである。以下、(ナレーター)は田村高廣、(吉岡)は作詞家の吉岡治、(弦)は作曲家の弦哲也のことである。

(ナレーター)「津軽海峡・冬景色」から八年。まだ、清純なイメージの残るさゆりを、女のさゆりに変える歌作りのための新しい制作チームが誕生して、吉岡治が加わった。その一作目が、この「春の雪」であった。続いて「波止場しぐれ」「大阪つばめ」とヒットはしたが、清純なイメージを拭い去ることはできなかった。何かが足りない。その時、制作チームのディレクターは、その何かを「修善寺物語」に見つけた。担当ディレクターの中村は、物語に登場する面作り師の娘、桂の源頼家に寄せる激しい想いに女の情念を感じた。そして、その情念を歌で、石川さゆりに表現させようと、次の曲の舞台に、この伊豆の地を選んだ。

(吉岡) 僕自身はね、『修善寺物語』っていうのをそんなに意識して書いたのではないんですね。これ(天城越え)に関し

ては。ただ、伊豆全体にそういうようなね、あの僕自身に、ふと感じたのと、そのプロデューサーと感じたのとすごく一緒になつて。

(弦) まあ、一致したんですね

(吉岡) うん。だから、僕の中ではね、『修善寺物語』っていうより、むしろ北条政子。あの娘の。源頼朝と一緒にいる北条政子像の方が結構強かった。北条政子っていうのは、割に意志のはっきりした人で、親の決めた嫁ぎ先に行かないで、好きな頼朝のところに行ってしまうでしょ。で、最終的には、自分の産んだ子の二代將軍の頼家を、あの、父親の時政と一緒に殺してしまう、みたいなね。幽閉して殺してしまう。そういうようなところが。

(弦) なんかその、女の性さがとかね。

(吉岡) 性さがというか。それと、やっぱり強さと。それはやっぱり、現代にも通じるんじゃないかと。で、それとやっぱり石川さゆりをこう結び付けて、普通だとしても結びつかないことなんだけど、とにかく結び付けてみて、なんかそれによってね、あの、そのそういうことを歌うことによって、なんかそういう時代の閉塞感みたいなものをね、こう彼女が歌うことによって、なんか突破口が開けるんじゃないかな、みたい

な、そういう気があったんですけど、⁽²⁵⁾ね。

(土曜特集「そして歌は誕生した」名曲のかげに秘められた物語」)

これまでのイメージを覆す突破口になるよう、女的情念をモチーフに曲を作った。当時、制作ディレクターであった中村一好が思い描いていたのは、岡本綺堂作の『修善寺物語』であった。これは、歌舞伎や映画、オペラにまでなっている、人気の名作である。面作り師夜叉王の娘桂が、愛する源頼家を守るため、面をかぶり身代わりとなって命を落とす場面からは激しい恋心が読み取れる。しかし、作詞家吉岡治がイメージしたのは、同じ伊豆に縁のある北条政子であった。意志がはっきりしている強い女性と石川さゆりを結び付け、新境地を開拓しようとしたのだ。実際に、第二八回NHK紅白歌合戦では、この『天城越え』で自身初となる紅組トリを務め、その後も一二回歌唱され続けている名曲となった。⁽²⁶⁾

この歌詞を読むと、他の女から移った香りがいつの間にか染みついていくことから、浮気に気づく。そして、他の誰かに盗られるならば、あなたを殺していいですか、と鬼気迫る場面に続く。曲りくねった山道、浄蓮の滝、と伊豆の風景が次々と現れ、愛情

から生まれた怒りや憎しみが昂る様子が歌い上げられる。舞い上がり揺れ落ちるというこの感情の起伏は、まさに浄蓮の滝の勢いよく落ちる水流とも重なっている。

ここで最も注目したいのが「山が燃える」ということばである。「山燃える」は秋の季語であり、実際には、紅葉で山が紅一面の様子を表わしている。ただ「燃える」とは、胸が熱くなり激しい感情が起ることを指しており、視覚的というよりは、目に見えない心情も表わしている。二番では、何か話すとなれば別れ話となり、それが割れた硝子のように心に突き刺さる。冷め切った関係で、あなたからの愛がなかったとしても、抱かれれば私は温まる。ここから、悲しくも一方的な愛であることがわかる。しかし、別れてしまつては終わるだけである。走馬灯のように情景が思い出され、どんなに恨んでも、どんなに憎んでも、あなたと共に越えたいと願う女からは、やはり一途な思いが見出される。

『天城越え』には女と男と愛人の三人が出てくる。愛人の存在が見つかり、殺したくなるほど「愛」が恨みに変わっても、一途に愛し続ける女。手放したくない、終わらせたくない、だから「共に死ぬ」という究極の選択は、相当な覚悟と狂愛が感じられる。忍んで耐えるのではなく、情が乱れるも、積極的に闘い抜く姿は、作詞家吉岡治が意図したように、やはりどこか北条政子と重なる。

五 北条政子

北条時政の長女として伊豆国に生まれた政子。源頼朝が伊豆に配流となった後、父の時政が彼を庇護する。そして、後に二人は恋に落ちる。この時のことは、『源平盛衰記』に次のように記されている。

されども件の娘、兵衛佐に志殊に深かりければ、白地に立出づる様にて、足に任せて何くを指すともなく兼隆が宿所を逃げ出でにけり。やや程ふれども見えざりければ、怪しみをなして尋ね求むれども、向後も知らずなりにけり。かの女は終夜伊豆山へ尋ね行きて、兵衛佐の許に籠りにけり。時政・兼隆、この由を聞きてければ、各々憤りをなしかれども、かの山は、大衆多き所にて、武威にも恐れざりければ、左右なく押し入つて奪ひ取るにもあたはずしてぞ過ぎ行きける。²⁷⁾

（『源平盛衰記』巻第一八）

平家に気兼ねする時政は、伊豆目代の山木兼隆の館に嫁として政子を送り込んだ。しかし、頼朝を思う政子は、その晩に、少しの外出を装い、頼朝の元へと駆け込んだ。時政も兼隆も、この事

実を知ると、激怒したが、駆け込んだ先の伊豆山は、武装した僧たちを多く抱えており、脅しても取り返すことのできない寺社勢力であった。そのため、頼朝と政子の仲を認めざるを得なかった。そして、その翌年には、二人の間に長女である大姫が誕生している。流人という時代の頼朝を支え、強い絆で結ばれた二人であったが、頼朝は政子の懐妊時、他の女性に心を奪われてしまった。亀の前という女性である。亀の前とは、良橋太郎入道の息女であり、そこまで身分の高い女性ではない。『吾妻鏡』によれば、「心操こゝとに柔和な人」、つまり、心の優しい人で、政子とは別のタイプの女性であったのかもしれない。

政子は、妊娠中に起こった亀の前と頼朝の密通を、父時政の後妻である牧の方から告げられた。激怒した政子は、牧一族の牧宗親に命じて、亀の前を匿っていた伏見広綱宅を破壊させた。広綱は、亀の前を連れ出し、大多和五郎義久宅に避難したという。

北条政子は、結婚、出産を経験し、最愛の夫が他の女を愛し、その夫や子供に先立たれ、夫の没後には尼將軍になるという波乱万丈の生涯を送っている。『天城越え』は、この「北条政子」をもとに描かれた歌の世界であるが、もちろん相違点は多い。まず、北条政子の時代は「一夫多妻」であったのに対し、『天城越え』が作られた現代は「一夫一婦制」における女の情念が描かれている。

そして、前者が浮気相手を攻撃するのに対して、後者は男に直接立ち向かっている。また、先述の『北の螢』と違って、『天城越え』には、自然や地名が登場する。実際にある地名を歌詞に取り込むことで、聞き手は豊かな想像を膨らませることができる。情念が山の燃えるような赤や、激しい滝水に委ねられ、具体的な景色として迫ってくるのである。体的な地名や誰もが想像しやすい自然を用いることで、より鮮明に状況が浮かびやすくなった。そういう意味では、螢に託した恋心に通じるのではないだろうか。

おわりに

「女の情念」とは、時代を問わず、歌に必要不可欠な要素の一つである。特に現代では、あなたがいないと生きていけないという未練、恋しさ、憎さに、自ら男のもとへ立ち向かう女の力強さが加わっている。新しい時代「令和」が始まったばかりの現在、桑田佳祐が坂本冬美に書いた「ブツダのように私は死んだ」が人気を博している。これまで見てきた二作に比べ、歌詞の語数が増えているが、同じく「女の情念」を歌っている。この歌にも、『北の螢』や『天城越え』でも見てきたような、「魂」や「火」という言葉が用いられており、「ゲリラ豪雨」や「落雷」といった自然も出てくる。⁽²⁸⁾ 歌を聴くことで、一本の物語を見ているような心境に至

る歌が今も変わらず愛されている。

大学二年生のとき、全学教養教育機構（CLA）のプロジェクト演習という授業で「浜恋路」という最中の商品化に携わった。「現代へ『百人一首』を再生すること」を目標に展開されたこの授業では、七七番・崇徳院の「瀬をはやみ岩にせかるる滝川のわれでも末に逢はむとぞ思ふ」と、五六番・和泉式部の「あらざらむこの世のほかの思ひ出に今ひとたびの逢ふこともがな」をモチーフとした最中を企画し、販売促進活動も行った。実際に、お客様の手に「浜恋路」が渡った瞬間、和菓子として、『百人一首』が現代に再生したことを実感した。

今回、本稿を執筆するにあたり、京都の北、貴船方面に足を運んだ。実際に、和泉式部と縁のある川や神社を目にすることで、より理解を深めることができた。神社へと繋がる参道には、「和泉式部恋の道」と名付けられている坂道があり、登っている際には、和泉式部に思いを馳せる自分もいた。もし、今の時代でも遊離魂が考えられるのであれば、和泉式部、北条政子、阿久悠、吉岡治の四人のもとへ翔んでいき、後世に残したこれらの宝に秘めた思いを直接聞き出したい。それほど興味深く、いつまでも受け継がれてほしい歌の世界である。

稿者は、日本の歌と関わる仕事に就くこととなった。古典和歌

の研究を生かし、取り上げた歌の魂を受け継ぎ、令和以降の歴史に名を刻む「女の情念」の歌曲を、後世に残していきたい。

注 (1) 『日本国語大辞典』、「情念」、<https://japanknowledge.com/lib/display/?kw=%E6%83%85%E5%B%BB&id=2002021f72519UISJTXZ>

(最終閲覧二〇二〇年十一月二七日)

- (2) 『日本古典文学全集』〔二〕日本書紀(一) 一一一頁
- (3) 『続々群書類従』、第十教育部、「本朝學原浪華鈔一」、題辭、四九〇頁
- (4) 『日本古典文学全集』〔二二〕源氏物語、(三) 蜷、二二〇頁
- (5) 『日本古典文学全集』〔一二〕伊勢物語、一四七頁
- (6) 『日本古典文学全集』〔一八〕枕草子、二五―二六頁
- (7) 『日本古典文学全集』〔二二〕源氏物語(三) 蜷、二〇一頁
- (8) 『日本古典文学全集』〔一二〕伊勢物語、一五二―一五三頁
- (9) 『日本古典文学全集』〔一二〕伊勢物語、一九〇―一九二頁
- (10) 『日本古典文学全集』〔一二〕古今和歌集、二八頁
- (11) 『日本古典文学全集』〔一二〕古今和歌集、二二四頁
- (12) 『日本文学 Web 図書館』、「私家集大成二卷一和泉式部Ⅰ和泉式部集」(榊原家本)、六六七。原文を一部書き改めた部分がある。
- (13) 『日本古典文学全集』〔二六〕紫式部日記、二〇一頁
- (14) 沓掛良彦氏によるものである。作品が十分に読まれぬままに、和泉式部像が一人歩きしていると表現している。
- (15) 一〇一〇年頃。
- (16) 原文を一部書き改めた部分がある。
- (17) 原文のままである。

- (18) 「文学の中の遊離魂―『離魂記』と『源氏物語』を中心として―」、陳明姿、五八―五九頁、六二―六三頁
- (19) 『新釈漢文大系 第二一七巻 白氏文集(二下)』、岡村繁、株式会社明治書院、平成一九年七月二五日、八〇九―八三三頁
- (20) 『日本古典文学全集』〔二三〕源氏物語(四) 幻、五四三頁
- (21) 第二六回日本レコード大賞。
- (22) 第二七回日本作詩大賞。
- (23) 「ふたつの歌魂 作詞家・阿久悠×作曲家・三木たかし」(二〇二〇年六月一八日放送、BSテレ東) より。
- (24) 『おもちゃのチャチャチャ』は、補作詞。作詞は野坂昭如。
- (25) 土曜特集「そして歌は誕生した」名曲のかげに秘められた物語」
- (26) 二〇二二年三月二八日現在。
- (27) 『新定源平盛衰記第二巻』、巻第一八、三五九頁
- (28) 『ブッダのように私は死んだ』、坂本冬美、<https://j-lyric.net/artist/a000070/10527f3.html> (最終閲覧二〇二〇年十一月二七日)

(二〇二〇年度卒業)